人文科教育研究　XVI　1989年　pp. 25−37

宮沢童話における構造的研究 1
——弱肉強食から自己犠牲へ——

横　山　明　弘

序

この論文の狙いは宮沢童話から構造を抽出することによって，宮沢の思想の輪郭を明瞭にするということである。作品の構造を把握することが，作品を理解するための方策や私の見解の論拠になるのではないかと考える。もちろん構造はそのための一手段に過ぎないことは，言うまでもないことである。また構造に着目することによって，宮沢の童話をいくつかのグループに分けることも試みたい。構造を抽出する方法は単純である。池上嘉彦氏が言う次のような方法に依っている。[1)]

民話について「構造」ということを考える時，注目するのは「筋」であるということはすでに見ました。「筋」を抽象化して行くことによって「構造」に到達するわけです。

この論文においては弱肉強食という構造を考察する。弱肉強食とは文字通り弱い者が強い者のえじきになることという意味の他に，強者が弱者を征服して，その犠牲の上に栄えることという内容も含んでいる。例えば人間社会における搾取などである。宮沢は強い動物が弱い動物を食べるという自然界の現実を，弱者の搾取の上に強者が栄えるという人間界の現実に重ね合わせる目を有していた。

1　弱肉強食の否定の構造

「フランドン農学校の豚」（1922年頃）は弱肉強食の弱者の側から強者の冷酷さや自己中心性を描いた作品である。農学校に飼われている豚が校長に脅され，死亡承諾書に爪判を押し，殺されてしまう。殺される前日豚は次のように死を恐れている。

豚はこれらの問答を，もう全身の勢力で耳をすまして聴いて居た。（いよいよ明日だ，それがあの，証書の死亡といふことか。いよいよ明日だ，明日なんだ。一体どんな事だろう，つらいつらい。）あんまり豚はつらいので，頭をゴツゴツ板へぶっつけた。

強者である人間が弱者である豚を殺して食べるという，我々には日常の弱肉強食の行為が，宮沢には容認しがたいことだったのである。豚の視点からその恐怖や苦痛を描くことによって，その不条理を読者に訴えているのである。したがってこの作品は弱肉強食の否定という構造を持っていると言える。

ところで1918年5月19日保阪嘉内あて書簡に，この作品の内容と関連した記述が見える。宮沢の心性がよく理解できる部分なので引用する。

又屠殺場の紅く染まった床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつきました。転倒した豚

の瞳にこの血がパッとあかくはなやかにうつるのでせう。忽然として死がいたり，豚は暗い，しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだものの生を得ました。これらを食べる人とても何とて幸福でありませうや。

母とその子が宿屋を営みました。立派な人があるときき て泊まりました。母はびっくりして自分らの見たこともないものを町からもとめさせ，一生懸命に之を料理し，自分では罰もあたる程の思いの御馳走をつくりました。御客様は物足りなさそうに膳を終へ，「この辺で鶏があるなら煮て出して呉れ。」と申しました。……（中略）……宿屋の子はそれを聞いて泣きたいのでせう。この感を大きくすると食はれる魚鳥の心待（ママ）が感ぜられます。

私がこの書簡について述べたいことは，この書簡の前半において「フランドン農学校の豚」と同じ素材を同様の視点から扱っていること，後半において社会的弱者の立場に身を置こうとする宮沢の心性が働いていることを指摘しておきたい。また序で言及しておいたように，宮沢が自然界における弱者と人間界における弱者を同列に見做していたということも，ここで再確認しておきたい。

「やまなし」は1923年4月8日の岩手毎日新聞に掲載された。この作品は＜五月の世界＞と＜十二月の世界＞から成立しており，＜五月の世界＞ではクランボンは魚に食べられ，魚はかわせみに食べられる。つまりかわせみ→魚→クランボン（→は食べるという意味を表す）という弱肉強食の構造から成り立っている。

クランボンが泡だとする説もあるがこれについては承服できない。なぜならクランボンは「殺された」と言われているし，魚は「何か悪いことをしてるんだよとつてるんだよ。」と描かれているからである。さらに前述したようにこのA→B→Cという弱肉強食の構造は，宮沢童話において何度も描かれる基本的構造であり，ここに宮沢文学の本質的な問題が内包されていると考えるからである。最近の研究では不詳とされることが多いが，クランボンは魚によって食べられる存在であることは間違いないであろう。

さてそれに対して＜十二月の世界＞では，蟹の親子がやまなしという自然の恩恵を受ける構造が描かれている。結論から述べると弱肉強食と自然（植物）の恩恵を受けるという構造は，明らかに対比されており，後者が宮沢の理想なのである。

宮沢はベヂタリアンであり，なるべく植物を食べ動物を殺さないようにしなければならないと考えていた。例えば「よだかの星」（1921頃）の中で，よだかが弟のかわせみの所へ別れを告げに行ったとき，次のように言っている。

「……そしてお前もね，どうしてもとらなければならない時のほかはいたづらにお魚を取ったりしないやうにして呉れ。ね。さよなら。」

これらを参考に「やまなし」を二つの構造を中心にまとめると次のようになる。この世界は弱肉強食で成立しておりあまりに悲惨である。だからできるだけ動物を殺さないで植物を食べ，自然（植物）の恩恵を受けて生きるのが良い。これが「やまなし」の主題であり，宮沢の基本的な世界観なのである。従来なぜ「やまなし」という題名がついているのかという疑問があった。そ

れはこのように弱肉強食を否定し，自然（植物）の恩恵を受けるという思想を宮沢が抱懐していたからである。

宮沢が北上河畔の沖積地を開墾し，農民のために肥料設計をしたり，炭酸石灰製造の仕事に手を貸したり，冷害につよい品種陸羽132号を勧めたりしたのも，このような世界観と関連づけることができる。

弱肉強食の連鎖から如何に離脱するかという問題は，後述するように宮沢にとって大きな問題であった。その解決策として自然（植物）の恩恵を受けるために，自己犠牲的に邁進したと言うこともできよう。それ程宮沢にとって弱肉強食は否定すべきものだったのである。

2. 弱肉強食と処罰の構造

「蜘蛛となめくぢと狸」は1918年「双子の星」と共に，家族に読み聞かせた作品である。佐藤隆房氏はこの作品について，明治大正を通じて世を風靡した「偉くなれ主義」に対して反撃を加えたものと言っている。[2)]

蜘蛛は網をかけ蚊やかげろうを食べ，虫けら会の相談役に出世するが，食物がたまって腐敗し雨に流されてしまう。なめくじはかたつむりと相撲を取り，とかげを舐めたりして食べてしまうが，雨蛙に塩をまかれて逆に食べられる。狸も兎や狼を宗教によってだまして食べてしまうが，病気になり体の中に泥や水がたまり，熱にうかされ焦げ死んでしまう。

この作品は弱肉強食の勝利者をなんらかの形で処罰するという構造を持っている。だが注意しなければならない点は，この弱肉強食には不当な側面があることである。つまり蜘蛛は食物を取り過ぎており，なめくじや狸はだましている点である。だから当然処罰を受けることになる。それに対して「やまなし」における弱肉強食の当事者達が処罰されなかったのは，それらの行為が自然の摂理であったからである。

ところでこの作品は「洞熊学校を卒業した三人」（1924頃）に改作されている。この改作で重要な点がある。それは蜂の生態が季節を追って挿入されている点である。

> ちゃうどそのときはかたくりの花の咲くころで，たくさんのたくさんの眼の碧い蜂の仲間が，日光のなかをぶんぶんぶんぶん飛び交ひながら，一つ一つの小さな桃いろの花に挨拶して蜜や香料を貰ったり，そのお礼に黄金いろをした円い花粉をほかの花のところへ運んでやったり，あるいは新しい木の芽からいらなくなった蠟を集めて六角形の巣を築いたりもういそがしくにぎやかな春の入口になってゐました。

このように蜂と花の自然界における共生関係が描かれている。「やまなし」では弱肉強食と自然（植物）の恩恵を受けることが対比されていたが，この作品においては弱肉強食と共生が対比されている。宮沢が弱肉強食より共生に価値をおいていることは言うまでもない。

結局「蜘蛛となめくじと狸」では弱肉強食と処罰の構造が描かれていたのに対し，「洞熊学校を卒業をした三人」ではそれに共生の構造がつけ加えられている。またこの作品から蜘蛛となめくじと狸の出世競争という構造も読めることを指摘しておきたい。

「カイロ団長」（1921頃）は舶来のウイスキーを飲み過ぎた三十疋のあまがえるが，とのさまがえるに借金をして，家来となって働かされる。そしてあまりに過酷な労働のため遂に王様の命令が出て，とのさまがえるが処罰され悔悟するという内容である。

とのさまがえるは王様の命令によって四千五百貫目の石を運ぶという処罰を受け，「……すべてあらゆるいきものはみんな気のいゝ，かあいそうなものである。けっして憎んではならん。以上。」という王様の第二の命令を契機として悔悟するのである。このように慈悲を内包した処罰ということがこの作品の特徴となっている。

この作品はとのさまがえる→（搾取）三十疋のあまがえるという弱肉強食と，王様の処罰ととのさまがえるの悔悟という構造になる。

「注文の多い料理店」（1921・11・10）は鳥や獣を撃つために山奥に入った若い紳士が，注文の多い料理店で逆に危うく山猫に食べられそうになる話である。

この作品は二人の紳士→（ハンティング）鳥・獣という弱肉強食と，犬の救出による処罰の未遂という構造になっている。紳士達は食べるためではなく，自分達の娯楽のために生き物を殺すのである。そのことは次の台詞によく表れている。

「鹿の黄いろな横つ腹なんぞに，二三発お見舞もうしたら，ずゐぶん痛快だろうねえ。くるくるまはつて，それからどたつと倒れるだろうねえ。」

この弱肉強食の構造は自然の摂理に反する娯楽のためのハンティングなので，二人の紳士は山猫によって処罰されるのである。自分達が食べられることに気づいた紳士達はがたがたふるえだす。そして絶体絶命のところで二疋の犬によって助けだされるけれど，紙くずのようになった顔だけは直らなかった。慈悲によって命は助けられている。

ところでこの二人の紳士は東京からやって来たと描かれている。後述するように「なめとこ山の熊」においても，小十郎を搾取する旦那は町に住んでいることから，都市―強者・山村―弱者という図式が成立する。これも宮沢文学における重要な問題である。

「氷河鼠の毛皮」は1923年4月15日に「岩手毎日新聞」に掲載された。

イーハトヴ発ベーリング行の列車に，ラッコや海狸や黒狐の外套と氷河鼠の頸の毛皮を四五十疋分集めて作った上着を着て，イーハトヴのタイチと呼ばれる顔の赤い肥った紳士が，どっしりと腰をかけて座っている。その重装備を自慢しながら，黒狐の毛皮を九百枚捕ってくるかけをしたことを乗客に話している。つまりこの紳士は動物を殺すことに，良心の苛責を感じていないのである。自分の娯楽のためにハンティングをするという点において，「注文の多い料理店」の二人の紳士と同一である。この紳士が車室にいた間喋と二十ばかり乗り込んできた白熊のような動物に連行されようとしたところ，同じ車室に帆布の上着を一枚しか着ていない青年がおり，紳士を白熊のようなものから救い出す。恐らくこの青年は動物を殺すことが嫌いなので毛皮を着ておらず，そういう意味で宮沢に近い人物と言えよう。そのことは次の台詞からも推測することができる。

「おい，熊ども。きさまらのしたことは尤もだ。けれどもなおれたちだって仕方ない。生き

てゐるにはきものも着なけあいけないんだ。おまへたちが魚をとるやうなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして呉れ。……」

弱肉強食は自然の摂理だが，この紳士のように殺される動物の痛みも知らず，何疋殺すかということをかけたり，毛皮をたくさん着込んで見栄をはったりする人物は処罰される。

この作品の構造は「注文の多い料理店」と酷似しており，イーハトブのタイチ→（ハンティング）ラッコ・海狸・黒狐・氷河鼠という弱肉強食と，青年の救出による処罰の未遂ということになる。

「オツベルと象」は1926年1月詩人尾形亀之助が編集した「月曜」創刊号に掲載された。

ぶらっと森を出てきた白象が稲扱小屋でオツベルにこきつかわれ，森に住む仲間の象に救出される話である。白象は働くことや人に尽くすことに喜びを見いだそうとしたのに，オツベルから手ひどい扱いを受ける。

どうだ，そうして次の日から，象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はたゞ五把だ。よくまあ，五把の藁などで，あんな力がでるもんだ。じつさい象はけいざいだよ。それといふのもオツベルが，頭がよくてえらいためだ。オツベルときたら大したもんさ。

白象の餌は藁10把から８・７・５・３と減らされていくのに，逆に労働はきつくなる。まさしく搾取の構造が描かれている。そしてとうとうこらえきれず白象は仲間の象に助けを求める手紙を出し，象の大群が白象救出のために押し寄せ，オツベルを潰してしまう。

この作品の構造を示すとオツベル→（搾取）白象・農民という弱肉強食と，白象の仲間によるオツベルの処罰ということになる。

ところでこの作品において結末の白象のさびしい笑いが問題となっている。私はこの笑いは誠意を尽くしたにもかかわらず，それが理解されることなく返って裏切られ，結局は暴力によってしか解決しない，弱肉強食（搾取）の関係を寂しく笑っていると考える。先に宮沢の書簡から旅館を営む母子が誠意を尽くしたにもかかわらず，客に裏切られた話を紹介した。そのときの母子の感情とこの場面における白象のそれとは，非常に近いのではないかと思われる。裏切り方がオツベルの方が手ひどいだけに，白象は泣くのを通り越して寂しく笑っているのである。オツベルの悪を透視している笑いである。

またこの作品はオツベルが殺されてしまい，他の作品には見られた慈悲がないという点において，特異であると一般に言われている。しかし「クンねずみ」において嫉み癖のあるねずみが猫の子供らに食べられたり，「蜘蛛となめくじと狸」においてなめくじが雨蛙に食べられてしまったり，宮沢童話において悪役が殺されてしまうことは全くの例外ではない。

ここで弱肉強食の強者を処罰した者を整理すると雨蛙（「蜘蛛となめくじと狸」）・王様（「カイロ団長」）・山猫（「注文の多い料理店」）・白熊？（「氷河鼠の毛皮」）・仲間の象（「オツベルと象」）となる。その他蜘蛛は腐敗し狸は熱病に犯され両者とも自滅している。注目すべきことは，作品中の弱肉強食の被害者が処罰者とはなっていないことである。例えば作品の前半において弱者であった者が後半において処罰することはなく，当事者以外の者が急にどこからと

もなく出現して，それを代行するのである。しかし現実において王様などに相当する者が実在しない以上，これらの作品に関しては甘さを感じるのである。

これは宮沢の信奉した仏教的世界観では復讐すれば輪廻を断つことができないので，悪事を働く者は自滅するか，王など当事者から超越したものによって罰せられるのが望ましいのである。だからオツベルは白象によってではなく，白象の仲間によって殺されたのである。あくまでも復讐ではなく処罰なのである。例えば「二十六夜」（1923頃）は宮沢の仏教的世界観をよく表している作品である。穂吉という梟の子供が人間の子供に捕らえられ骨を折られ，梟たちがその復讐を考えているとき，梟の坊さんが次のように言う。

「いやいや，みなの衆，それはいかぬじゃ。これほど手ひどい事なれば，必ず仇を返したいはもちろんの事ながら，それは血で血を洗ふのじゃ。こなたの胸が霽れるときは，かなたの心は燃えるのじゃ。いつかまたもっと手ひどく仇を受けるじゃ，この身終って次の生まで，その妄執は絶えぬのじゃ。遂には共に修羅に入り闘諍しばらくひまはないじゃ。必らずともにさやうのたくらみはならぬぞや。」

宮沢が復讐を描かず避けているのは，このような仏教的世界観の反映だと思われる。

3　弱肉強食からの離脱の構造

「烏の北斗七星」（1921・12・21）は烏の大尉が山烏と戦い勝利を収め，少佐に出世する話である。だが大尉は勝利と出世にもかかわらず次のように祈る。

（あゝ，マヂエル様，どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに，そのためならば，わたくしのからだなどは，何べん引き裂かれてもかまひません。）

烏の大尉は弱肉強食の世界からの離脱を願っている。そしてそのためには自己犠牲も辞さないと言っているのである。だがこの作品においては自己犠牲は祈りに留まっている。この作品において注目すべき点は，宮沢における自己犠牲という思想が弱肉強食が最も露骨に現れる戦争から生まれているということである。

「よだかの星」（1921頃）では皆の嫌われ者のよだかが鷹に名前を改めろと脅され，自分が弱者の立場に身をおいたとき次のことに気づく。

（あゝ，かぶとむしや，たくさんの羽虫が，毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ，つらい，つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや，その前に，僕は遠くの遠くの空の向こふに行ってしまはう。）

つまりよだかが鷹に脅されたとき，よだかは自分もかぶとむしや羽虫にとって強者であることを自覚したのである。この構造は鷹→（脅迫）よだか→（食べる）→かぶとむし・羽虫という弱肉強食を示している。

そしてよだかはこの連鎖から離脱しようと試み成功するのである。それは星になって燃え続け

ているという描写によって暗示されている。したがってこの作品は弱肉強食とそこからの離脱という構造から成り立っている。

この作品について続橋達雄氏は次のように述べている。

賢治の場合，生命維持のための欲望の充足を最小限にとどめるか，彼方の世界へ身を投げ出すことで，苦痛から逃れようとする。苦痛に対しては，あくまで受け身の構えであり，したがって生きるという場面でも消極的で逃避的な姿を見せる。[3)]

よだかの「僕は遠くの遠くの空の向こふに行ってしまはう。」という言葉は確かに＜消極的で逃避的＞だが，私はこれは仏教で言う＜出離＞と考える。先に述べたように弱肉強食の世界から遠ざかり離脱しようとしたのである。またよだかが命がけで＜出離＞して行く姿を描くことによって，他力より自力を価値づけているのである。その命がけの飛翔や，聖性・不死・永遠・希望の象徴とされる星になって，光り続けていることを考慮すると，＜消極的で逃避的＞という評言には承服できない。星は＜到達しがたい理想＞をも表すのである。(イメージ・シンボル辞典)

さらにこの作品を書いたと言われる1921年の前年には国柱会に入会しており，この作品は上京して国柱会の運動に参加していたときに創作されたと言われているので，当時の思想とも矛盾するのではないだろうか。ただ後期の作品に明瞭に描かれる他者のための自己犠牲という思想は描かれていない。

先に触れた「二十六夜」（1923頃）は梟の大僧正の三晩にわたる講義と，その間に生じた事件が描かれている。大僧正の講義の内容はやはり弱肉強食のことが中心に語られる。梟は小禽を食べ螺蛤を啄み悪業を作り，一方人間や強鳥を恐れている。つまり人間・強鳥→（ハンティング）梟→（食べる）小禽・螺蛤という弱肉強食の構造が示される。そして一疋の雀が飢饉のとき自分の身を投げ出し，人間の親子を救うという自己犠牲的行為によって，施身大菩薩・疾翔大力と呼ばれるようになった経緯を話す。

そして穂吉の事件が起きるのである。穂吉は評判の良い子だったが，人間の子供に捕まり足を折られて放される。意識を失いそうになりながらもこの大僧正の講話を聞いている。大僧正に言われたように人間を恨まず死んで行ったので，輪廻を断ち切り飛翔大力に迎えられるのである。人間を恨まずに死んで行ったということは，最後の「ほんとうに穂吉はもう冷たくなって少し口をあき，かすかにわらったまゝ，息がなくなってゐました。」という描写によって理解することができる。穂吉は弱肉強食の世界を離脱することができたのである。杉浦静氏はよだかも小十郎も穂吉も，＜臨終正念＞によって＜生存の罪＞を脱して，＜離苦解脱の道＞に入ることができたと論じている。[4)]

「ポラーノの広場」（1927・6・29） ではファゼーロが旦那のテーモに過酷な労働を強いられている。

「ひまって今日でもいゝよ。」「ぼく仕事があるんだ。」「今日は日曜ぢゃないか。」「いゝえ，ぼくには日曜はないんだ。」

ファゼーロはこのようにテーモにこきつかわれ，姉のロザーロもテーモによって嫌なデステウ

パーゴと結婚させられようとしている。ポラーノの広場を捜していたキューストとファゼーロは偶然デステゥパーゴたちの宴会に出食わし，ファゼーロとデステゥパーゴは些細なことで決闘することになる。ファゼーロはその後失跡してしまう。しかししばらくして革を染める技術を身につけ帰ってくる。そしてファゼーロはハムや革やオートミルを作る産業組合を作り，搾取のない人間関係を築きあげる。宮沢の理想が窺える作品である。この作品では宮沢に近いキューストの産業組合への係わり方が問題となっている。

多田幸正氏は「ポラーノの広場」の初期形態では各自の製作品を互いに交換しあう自給自足経済が描かれていたが，最終形態では共同の労働と共同の資金で自主的に運営する協同組合に書き替えられたと論じている。さらに宮沢は農民の生活を楽にするためには，貨幣を使っての経済はだめだとよく言っていたのに，その自給自足経済から<売る>ことを建前とする産業組合へと考えを転換したということである。[5] どちらにしても搾取を否定し，弱肉強食からの離脱を理想として描いている。

「なめとこ山の熊」（1927年頃）はマタギである小十郎が家族のために熊を殺し，せっかく手にいれたその肝と毛皮を町の荒物屋の旦那に安く買われてしまうという話である。

> けれども日本では狐けんといふものもあって狐は猟師に負け猟師は旦那に負けるときまっている。こゝでは熊は小十郎が旦那にやられる。

宮沢は三者による弱肉強食の関係を相当意識していたもの思われる。この構造は旦那→(搾取)小十郎→（ハンティング）熊と示される。

佐藤道雅氏はこの描写を次のように手厳しく批判している。

> まず小十郎のかかえる殺傷罪をいかに解決するかという問題と，安く買いたたく旦那をいかにのりこえるかという問題がここでは錯綜してしまっているはずだ。……（中略）……私たちは，二つのテーマはそもそも同一段階で論じられないのだということを知っているし，また賢治の意識に社会性の希薄さを指摘することもできる。もしテーマを別々にして描くなら，いかにもすっきりした作品にすることができたろう。[6]

これは私の論文の構想にも関わる問題である。例えば後述するように東北において，小作人が冷害によって小作料を支払えないとき，餓死したり人身売買などを行うことは地主によって食べられていることと同義であろう。動物以上に人間は<自己拡張の意志>が強いのではないだろうか。これに対する制限がないとき多くの犠牲者が出るのである。

ある年の夏小十郎は木によじ登っている大きな熊に銃を構えたところ，あと二年だけ待ってくれと懇願される。そして二年後小十郎の家の前で血を吐いて倒れている熊を見たのである。この熊の自己犠牲の行為をつきつけられて，小十郎は今までの罪責感を押さえきれなくなったであろう。作品の表層には小十郎が鉄砲をはずし，熊に襲われたように描かれている。だが私は小十郎の熊に対する罪責感や慈悲心が，熊撃ちの名人であった小十郎の腕を誤らせたと読んでいる。つまり自死に近い死であると。そして小十郎は弱肉強食の世界から離脱することができた。繰り返すがその契機となったのは，自己犠牲的に身を投げた熊の行為であった。したがってこの作品の

構造は，自己犠牲を媒介とした慈悲による弱食強食からの離脱となる。

4　自己犠牲の構造

「ひかりの素足」（1922年頃）は二人の兄弟が吹雪に出会い，気を失って夢のような世界を覗く。鬼が鞭で弟の楢夫を打とうとしたとき，兄の一郎が「私を代わりに打ってください。」と庇う。そして仏が出現し弟を捨てなかったときの気持ちを忘れるなと言い，楢夫は死ぬものの一郎は助けられる。つまりこの作品は地獄と極楽が存在することを暗示し，自己犠牲の精神を忘れるなと言っているのである。この作品において楢夫の死を知った一郎の気持ちは，「銀河鉄道の夜」においてカムパレルラの死を知ったジョバンニと同様描かれていない。しかし楢夫の死を代償にして，一郎は仏の存在を知ることができたのである。一郎の今後の人生が自己犠牲的であることが予想される。ここにおいてAの犠牲がBの自己犠牲を生むという構造を読むことができる。このAの犠牲がBの自己犠牲を生むという構造は，宮沢の後期の代表作によく表れる特徴なのである。

ところでこの作品において＜罪＞という概念が描かれている。

「罪はこんどばかりではないぞ」

「おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ。」

前者は鬼の言葉で後者は仏の言葉である。きわめて観念的で＜罪＞の内容を作品の上で，具体的に理解することはできない。ここに典型的に見られる＜観念性＞がこの作品の弱点と言える。だがこの論文において論じてきた弱肉強食を＜罪＞の一つに数えることができる。そのように考えるとこの作品から，自己犠牲による罪（弱肉強食）からの離脱という構造を読むことができる。

この節においても弱肉強食からの離脱という構造を内包した作品を扱うが，主人公の自己犠牲の構造を持つということにおいて前節と区別している。

「グスコーブドリの伝記」は1932年3月「児童文学」に発表された。冒頭においてブドリの両親が森へ行って居なくなってしまう。実はこれは二人の子供を少しでも行きのびさせようとする自己犠牲の行為だったのである。

それから，わたしはお父さんをさがしに行くから，お前たちはうちに居てあの戸棚にある粉を二人で少しづつたべなさいと云って，やっぱりよろよろ家を出ていきました。

ブドリがその後一心に科学を学んだのも，カルボナード火山島を爆発させるために一人島に残ったのも，幼少時のこのような悲惨な経験があったからである。ブドリの両親の自己犠牲がブドリの自己犠牲の遠因にあったのである。したがってこの作品もAの自己犠牲がBの自己犠牲を生むという構造になっている。

ところでこの作品にもブドリがてぐす飼いの男に搾取されるという弱肉強食の構造が描かれている。だが他の作品においては弱肉強食は中心的なテーマであるが，この作品においては脇に退けられ，離脱すべき対象は過酷な自然状況になっている。つまり自己犠牲による過酷な自然からの離脱という構造になる。

「銀河鉄道の夜」（最終形 1931 年頃）は周知のように宮沢の代表作である。私はかつてこの作品を＜自己浄化の旅＞と論じた。[7] つまり父が不在で母が病に臥し孤独でひがんでいた少年が，友の死を契機として罪を銀河の十字架につけ，みんなの幸福のために生きようと新しく生まれ変わる話であると。

一緒に旅をしたカムパレルラはジョバンニにいじわるだったザネリを救おうとしてすでに溺死していた。ジョバンニはそのことを知らないでカムパネルラと銀河を旅し，そこで二つの自己犠牲の話を聞く。

第一は姉弟の家庭教師である青年の話である。青年たちは渡航中氷山にぶつかり，溺れ死んで銀河鉄道に乗り込んできたのである。青年は姉弟を救うために他の子供たちを押しのけ，その神に背く罪を一人で背負うかと思ったり，このまま神のみ前にみんなで行くほうが姉弟のほんとうの幸福だとも思ったり，迷っているうちに水に落ちてしまったのである。青年は＜他の子供たちを押しのける＞という弱肉強食の行為を実践することができなかったのである。

第二は女の子の語った蝎の話である。バルドラの野原に住んでいた一ぴきの蝎は小さな虫やなんかを殺して食べていた。ある日いたちに見つかり食べられそうになったとき，井戸に落ちて溺れ始め，次のように祈ったという。私はいくつも命をとってきたのに，自分が食べられそうになったときは一生懸命にげた。こんなにむなしく命を捨てずに，どうかこの次にはまことのみんなの幸いのために私の体をお使いください。つまりこの話は自己犠牲による弱肉強食からの離脱という構造を持っている。

この青年と女の子の自己犠牲の話を聞いて，ジョバンニが感動しているところに，実はカムパネルラは先程述べたようにザネリを救うために，溺死していたという話を地上に帰ってから聞かされるのである。自分の唯一の友はすでに自己犠牲の死を遂げていたのである。二人のみんなの幸いのために生きようという銀河での誓いは，ここで凝固したと私は考えるのである。

したがってこの作品は青年と姉弟・蝎・カムパネルラの自己犠牲が，ジョバンニの菩薩行に生きるという自己犠牲を生んでいるのである。したがってこの作品も自己犠牲による弱肉強食からの離脱という構造を持っている。

さてそれでは最後に「ビヂテリアン大祭」（1923年頃）を通して自己犠牲という思想の背景を考察することにする。

「ビヂテリアン大祭」は宮沢の食肉に関す思想を表明した作品である。ビヂテリアンをその精神から大きく分けると，食べられる方になって考えるとかわいそうであるという同情派と，病気予防のためになるべく動物質を食べないという予防派に分けられる。そして実行の方法から分類すると次の三つに分けられる。第一はミルクやバターなど動物質のものは全く食べないという立場，第二は命を取るわけではないからミルクやバターは差し支えないという立場である。第三はもしたくさんの命のためにどうしても一つの命が入用のときは仕方がないから，泣きながら食べてもいい。その代わりもしその一人が自分になった場合でも敢えて避けない。しかしそういう場合は実に少ないから，ふだんはなるべく植物をとり動物を殺さないようにしなければならないと

いう立場である。この第三の立場は弱肉強食と同時に自己犠牲の内容を包含している。見田宗介氏はもしも＜わたし＞の生命を絶対化する立場を離れることができれば，＜生命連鎖＞という事実そのものは生命界の＜殺し合い＞という位相から見ることもできると同時に，生命たちの＜生かし合い＞＜支え合い＞という位相から見ることもできるとこの第三の立場を解説している。[8] この立場は「なめとこ山の熊」における小十郎や，「銀河鉄道の夜」における蝎の立場である。とにかく宮沢に近いと思われる主人公の＜私＞は同情派であり，第三の立場を取っている。

この作品ではビヂタリアンと異教徒がかなり高度な論争を展開する。そして最後に＜私＞が登場し自己の思想を表明するのである。つまりビヂタリアンであることの根拠を次のように開陳するのである。

> 総ての生物はみな無量の劫（カルパ）の昔から流転に流転を重ねて来た。流転の階段は大きく分けて九つある。われらはまのあたりその二つを見る。一つのたましひはある時は人を感ずる。ある時は畜生，則ち我等が呼ぶ所の動物中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にはいろいろ他のたましひと近づいたり離れたりする。則ち友人や恋人や兄弟や親子である。それらが互いにはなれ又生を隔ててはもうお互いに見知らない。無限の間には無限の組合せが可能である。だから我々のまわりの生物はみな永い間の親子兄弟である。

つまり＜私＞は仏教的世界観を蔵しているが故にビヂタリアンなのである。この作品の冒頭においてもビヂタリアンを菜食主義者と訳すより，菜食信者と訳す方が実際にかなっていると言っている。

宮沢は仏教的世界観を採用しているが故に，肉食と矛盾し弱肉強食の思想を否定するのである。すべての生物は長い間の親子兄弟であるから，食べるには忍びないのである。しかし生きることは食べることであり自分が他を食べる以上，自分が必要とされれば身を投げ出さねばならないというのである。ここ自己犠牲の思想が胚胎している。つまり弱肉強食と自己犠牲はコインの表と裏なのである。

自己犠牲は仏教でいう捨身や菩薩行とほとんど同義であろう。自己犠牲の目的は弱肉強食の輪廻を離脱することにあったと思われる。「手紙一」に依るといつも悪いことをしていた龍が，あるとき改心して猟師に皮をやり，蟻に肉を食べさせ仏になったという。したがって宮沢にとって自己犠牲は弱肉強食の輪廻から離脱するための方法であったのである。

磯貝英夫氏は弱肉強食の問題について次のように述べている。

> この問題を，仏教的汎神論の視野において，もう一つ根源のところまでおろすと，〝生物はどうして他の生物を食べなければ生きられないのか〟という問になります。いかにも仏教徒らしい問といえばそれまでですが，この，だれにも答えられない恐ろしい問が，かれの最大の問題であったことは，かれの童話のかなり多くのものが，この主題によって貫かれていることによってわかります。もしこの原理を容認すれば，かれの共生感の世界，曼陀羅の世界は崩れ落ちる危険があるわけで，したがって，かれはこの矛盾を避けずに，きびしく見つめつづけるのです。これは，結局，祈りや信仰にしか帰着させえない生の根源的矛盾であるの

ですが，この矛盾を見つめている以上，かれの童話が，通俗的なハッピーエンドをほとんど持っていないのは，そのせいと言ってよいでしょう。[9)]

確かに弱肉強食は<祈りや信仰>に帰着するしかない難問である。しかし今見てきたように後期の童話を読むと，自己犠牲的に生きることによってこの難問を突破しようとしていることが分かる。病床の身であるにもかかわらず，訪ねてきた農民に肥料のことで相談に応じたその最期がそのことをよく実証している。

ではなぜこのように宮沢が弱肉強食や自己犠牲に拘泥したのだろうか。先に宮沢の後期の童話において，Aの犠牲がBの犠牲を生むという構造が存在することを指摘しておいたが，このAにあたる存在を宮沢の生活環境から探ることができる。そのAにあたる存在とは妹としであり岩手の農民である。

周知のように1922年，としは肺結核のため二十四歳の若さで死去した。そのとき作られた「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」は宮沢の衝撃の大きさを伝えている。さらにとしの行方を追った「青森挽歌」も残されている。ここではとしが天に生まれたか地獄に生まれたかと，その安否が気遣われている。つまり宮沢はとしの死を契機として異空間の存在を探求しているのである。私はかつて宮沢には地獄に流転することへの畏怖があったと論じた。[10)]結論を言えば宮沢の自己犠牲はその来世観と密接なつながりを持っているということである。

このような体験と思想が宮沢の童話，特に「ひかりの素足」（1922年頃）・「銀河鉄道の夜」（遅くとも1926年初期形）に投影していると考えるのである。楢夫やカムパネルラの死を通して一郎やジョバンニが異空間の存在を知り，自己犠牲的な生き方を選択する構造は，宮沢がとしの死を契機として異空間を追求し，自己犠牲的な生き方を実践した構造と同一なのである。

次に農民の問題に移りたい。彼らは進んで犠牲を生きた訳ではないが，地主によって犠牲を強いられたのである。

弱肉強食とは生物界の属性であって，生物が存在するところ常に生起する現象である。だが宮沢が生まれ育った岩手県においては，自然環境に恵まれなかったため，その犠牲の状況が特にはなはだしかったのである。真壁仁氏に拠ると当時小作料が高く定額小作料は一定だったから，冷害で減収の年に高い封建地代を収めることは餓死を意味していた。小学校を卒えたばかりの少女は口減らしのため無給で子守奉公に出され，年ごろになった娘は遊廓に売られた。もちろん小作料減免や借金棒引きの要求を地主につきだすこともあったという。宮沢が北上河畔に独居して農民指導をした時代から，東北砕石工場に技師として働いていた時代とそれは重なる。[11)]

一方質・古着商として花巻指折りの富有な商家となった宮沢商店は，近村に多くの小作地を所有していた。東北地方の農家は仕事で忙しいので娘が裁縫修業をする余裕がなく，古着商の顧客となった。[12)]小沢俊郎氏は「農民から利子を得ることによって肥って来た家の一子孫として，賢治の心には，宮沢家を代表しての贖罪の心が起り，それが賢治のああした生き方を生んだのであろう。[13)]」と述べている。宮沢の自己犠牲的な生き方を贖罪だけですべて説明できるとは思わないが，贖罪の意識があったことは質・古着商を止めるよう父に勧めたことからも推測できるのである。

結論

以上宮沢童話から弱肉強食を描いている作品を取りあげた。ここで弱肉強食の内容を整理すると食べるということ（「フランドン農学校の豚」「やまなし」「蜘蛛となめくじと狸」「よだかの星」「二十六夜」「銀河鉄道の夜」「ビジテリアン大祭」），搾取（「カイロ団長」「オツベルと象」「グスコーブドリの伝記」「ポラーノの広場」「なめとこ山の熊」），ハンティング（「氷河鼠の毛皮」「注文の多い料理店」「二十六夜」「なめとこ山の熊」），戦争（「烏の北斗七星」）というふうに分類することができる。

以下この論文における要点を整理しておく。第一に弱肉強食と処罰の構造を持つ作品は，処罰者に現実性がないという点において評価できないということ。第二に弱肉強食からの離脱の方法としては二つあげられる。一つは肉食をしないでなるべく植物を食べること，二つは自己犠牲を実践し命を捨てる覚悟を持つことと言える。宮沢はこの二つを実生活において実践している。第三に自己犠牲の思想は世界が弱肉強食から成立しているという強い認識から生まれていること。自己犠牲の思想は1920年の初期から見られ「なめとこ山の熊」「グスコーブドリの伝記」「銀河鉄道の夜」など1930年前後の作品にその思想を実践する人物が登場する。これは宮沢の羅須地人協会（1926～1928）での活動の反映と見ることができる。第四に宮沢の思想に仏教的世界観の影響を指摘しておくことは当然であろう。

〔註〕

(1) 池上嘉彦　『ことばの詩学』　岩波書店　1982　341ｐ
(2) 佐藤隆房　『宮沢賢治』　冨山房　1942　51ｐ
(3) 続橋達雄　「よだかとはと（上）」　四次元　1964・2　156号
(4) 杉浦　静　「二十六夜」考　国文学解釈と鑑賞　至文堂　1986・12
(5) 多田幸正　「『ポラーノの広場』論」　「日本文学」　1988・3
(6) 佐藤道雅　『宮沢賢治の文学世界－短歌と童話－』　泰流社　1979　148～149ｐ
(7) 横山明弘　「『銀河鉄道の夜』論」　「人文科教育研究ＸⅣ」　1987・9
(8) 見田宗介　『宮沢賢治』　岩波書店　1984　149～150ｐ
(9) 磯貝英夫　「日本近代文学史上における宮沢賢治」　「日本文学」　1968・10
(10) 横山明弘　「『ひかりの素足』から『銀河鉄道の夜』へ」「日本語と日本文学」　1988・6
(11) 真壁　仁　「賢治と飢餓の風土」　「國文学」　1975・4
(12) 小倉豊文　「二つのブラック・ボックス」　「宮沢賢治２」　洋々社　1982　第２号
(13) 小沢俊郎　「階級的劣等感」　「四次元」　1959・1

尚，本文の引用は校本全集に依った。

作品の成立年代は続橋達雄氏の「賢治童話全作品目録」（國文学 1986・5）に拠った。